

学生のページ

海外に羽ばたく

第4回 海外のボランティア

いしがきしげなお きゅうばひろこ せき かつみ
石垣成直・休場裕子・関 克己

第4回目を迎えた「海外に羽ばたく」ですが、今までは海外に会社から派遣された方々のお話を伺ってきました。そこで今回は少し視点を変えて海外青年協力隊の一員として海外でボランティア活動の経験のある(株)竹中土木の小嶋平三氏にお話を伺うことにしました。小嶋氏は、会社を退職して海外青年協力隊に参加されました。

小嶋平三 氏 Heizo KOJIMA



1956年 生まれ
1980年 京都大学工学部土木工学科卒
1980年4月 (株)竹中土木 入社
1991年3月～93年8月
会社を退職し海外青年協力隊に参加(赴任地 フィリピン)
1993年9月～現在 (株)竹中土木 技術本部に復帰

小嶋さんは海外青年協力隊(以下協力隊と略記)に参加され、海外でのボランティア経験があります。「帰国してから7年も経っていて、古い話で申し訳ない」と言われながらも、その時の話を熱く語っていただきました。

まずは、協力隊に参加するまでの話からお聞きしたいと思います。

協力隊に参加しようと思ったのはいつ頃からですか？

そうですね、漠然と興味を持ち始めたのは大学時代からです。まだそのころは自分が本当に参加するとは思っていなかったのですが... 行こうと行動に移したのは30歳を過ぎたころからです。

協力隊の参加には試験があるそうですが、それは具体的にどのような問題ですか？

試験自体は小論文と語学のテストです。小論文は普通なのですが語学のテストは面白かったですね。どういったテストかという、仮想の言語が与えられていて、その文法を考えいろいろと応用してみるといったもので、語学力そのものよりも未知の言語に対する適応能力を試すような問題でした。

試験のほかにはどういったものがありましたか？

試験以外にも面接がありましたね。まあ面接はそれほど変わったところはなかったのですが、意外に健康診断が厳しかったようです。試験や面接をパスしても健康診断でだめになってしまう人が結構多いそうです。

それだけ健康であるということが重要視されるのですね。

そうですね。基本的には協力隊に参加すると2年間は日本には帰ってこれませんから。協力隊の事務局としてもその点は厳しく審査しているみたいですね。

協力隊に対するイメージというのはどういったものでしたか？

興味を持ち始めたころは、「水も電気もないとは言わないまでも不自由なところで生活して、現地の人々とともに働き、新しい物を建設する」というイメージですね。簡単に言えばサバイバル生活を想像していました。

たしかに協力隊というと、「現地の人々と井戸掘り」というイメージがありますね。

確かに今でもそういった職種はあります。でも、協力隊の職種には大きく分けて現場型とオフィス型があって、最近ではオフィス型が半分以上占めていると思います。オフィス型は都市や町での仕事が多いです。

協力隊に参加したいと思ったいちばんの理由はなんですか？

いちばんの理由は「異文化」への関心ですね。それに、「異文化」の中に置かれた自分自身はどう変わるのかということにも興味がありました。それで派遣先にはアフリカを希望していました。やはりアフリカは日本とはぜんぜん違うと思いますしね。最初はエチオピアに派遣される予定でしたが出発の一週間前に内戦が勃発してしまい、結局はフィリピンへ行くことになりました。振



ラ・トリニダットの風景

替え国がフィリピンに決まったときには、正直言ってやめることも考えました。あまりにも物理的にも、精神的にも近すぎると思ったからです。でも、この機を逃せば、二度とチャンスはないと思って行くことに決めました。今では、絶対行ってよかったと思ってますけれど。

参加した理由のもう一つとして、土木という業種は本来もっと生活に密着したものだと思います。例えば、道路一本、橋一本によって、今まで病気で亡くなっていた方が、すぐに病院に行くことができ、救うことができるというような。そういったことを実感したかったこともあります。

アフリカとアジアって具体的にはどのようなところが違いますか？

日本人に対する見方がかなり違うと思いますね。アジア人は日本人に対して親近感を持って接してくれる場合が多いですけど、アフリカ人はなんとも思っていない。というか日本に対して全く無関心です。当然気候風土も違いますし、食べ物、習慣も大きく違います。

僕はフィリピンで生活しましたが、言葉が違うというだけで日本の田舎での暮らしとたいして変わらないと思いますよ。

では、参加すると決まった時のことを教えてください。

協力隊に参加したのは35歳の時でした。当時は協力隊の参加資格が35歳までということで、「今しかない」という思いが強く退社してでも行こうと決めて会社に相談したところ意外とすんなりと退職を認めてもらったという感じですね。

退社してでも行く覚悟を決めたものはなんですか？

やはり、「このままやらないで後悔はしたくない」という思いが一番でしたよ。やってみて思ったとおりにならなくても自分自身納得できたと思います。ただ、年齢制

限のことでいろいろと吹っ切ることができましたね。

協力隊に参加すると決めた時の周りの人たちの反応はどうでしたか？

まず反対されることはなかったですね。あまり驚いてもらえませんでしたけど、おそらくそういうのが似合っているとされていたんだと思いますね。

会社の方はどうでしたか？

最初に行こうと思った30歳頃には、「行きたい」と会社に相談したら止められてしまい、まあその時は退社する覚悟もなかったので諦めました。2度目が35歳のときです。その時は私も退社してでも行く覚悟ができていたのですが、理解ある上司のおかげであれよあれよという間にオーケーがでて。結局会社の方は休職扱いにしてもらえました。

ただ当時は現場に勤務していきまして、ちょうど忙しくなる時期である年度末にいなくなるということで現場の人たちには大変迷惑を掛けました。

それではここからは協力隊に参加している時のお話をお願いいたします。

協力隊に参加する時は、まずは3か月間の研修が日本であります。それから2年間それぞれの赴任地に行くこととなります。

研修ではどんなことをするんですか？

やはり、語学が中心になりますね。また、それに加えて現地事情や業種別実情などを学びました。それらを通して異文化を疑似体験していきます。また、健康診断が厳しかったように現地での病気に対してかなり気を使っているようで、保険衛生面での研修もかなりありました。例えばマラリア対策として、「蛍光色の服は虫が寄ってきやすいので着ないように」など生活に密着していて、勉強になったというよりは、大変なところに行くんだなという実感が沸きましたね。ただ、危ないからといって



ホストファミリーと

行動を制するのではなく、危なくとも必要な場合、また、そうなってしまった場合にどう対処したらいいかということに主眼が置かれていて、大変意味のある研修でした。

研修所の生活はどうでしたか？

一言で言えば「いろいろな人がいて面白い」というのに尽きますね。それに自主性の強い人が多かったです。また訓練中は海外での習慣を考慮して、年齢による役割の差、互いの関係の差はありませんでした。これには、先輩後輩という関係を常に気にして生きてきた私はかなり戸惑いました。

現地に赴任した時はすんなり生活に溶け込めましたか？

現地に行ってすぐに仕事をするわけではなく、現地でも約1か月間の研修があります。そこで現地の言葉を詳しく勉強します。要するに方言を習うわけですが、ただ、私は現地でもなるべく英語を使うようにしました。仕事はそれでも大丈夫でしたが日常生活においては明らかにマイナスでしたね。周りになかなか溶け込めなくて、その点は大いに反省しています。

現地では、紹介していただいたフィリピンの家庭に2年間ずっとホームステイをしていました。ここでも子どもが娘さんたちばかりだったせいか、最後まで溶け込めなかったです。

赴任地ではどのような業務をなさったのですか？

フィリピンのラ・トリニダットという町の役場に勤めることになりました。40人ぐらいの小さな役場で建設部と開発計画部の両方に所属しました。発展途上国の人とは怠惰というイメージを持っていましたが予想とは違って、また技術力も予想以上でしたよ。

「都市計画」という職種だったのですが、具体的に課されたものはなく、この町の今後のために、自分でできることを探す作業から入る感じでした。具体的にはごみ処



エンジニアリング・オフィスの面々と

理、上水道供給システム、下水処理に関する提案書を書いたり、区画整理手法を紹介したりしていました。これらをまとめる段階でも、会社の同僚をはじめ、多くの方々に大変お世話になりました。これらを持って、省庁の出先機関や他の自治体、大学等に勝手に話をしに行ったりもしていました。もっとも、このように活動の場を広げられたのは、やっと言葉が話せるようになった最後の6か月くらいですけれどもね。ただ、協力隊の主たる目的はわれわれの持っている技術なり知識を現地スタッフに伝えることなのですが、すべて一人で済ませてしまい、その意味では協力隊員としては失格かもしれません。

休日はどうのように過ごされましたか？

主にテニスをしていました。あまりうまくはないですけどね。あとは、日本語の講師もしましたよ。私の赴任した町は日系人が多く日本語に興味を持っている人が多かったですね。簡単に引き受けたのですが、いざ教えてみると難しいことが多く、あらためて日本語の勉強になりましたよ。特に「が」と「は」の使い分けなんて今まで意識したことなかったですからね。

協力隊として参加するということと会社として派遣されることの大きな違いというのはどういったところですか？

いちばん大きいのは結果の求められ方ですね。やはり会社で派遣されるということは必ず結果が求められると思います。それに雇用する側と共同作業という立場の違いも大きいですし、協力隊は現地の人々と共に生活することを主眼にしていることから、現地での生活レベルも大きく違います。

先ほども言いましたが、協力隊の場合、プロジェクトとして確立されていない場合も多く、戸惑いますが、それだけ自由度の高い活動ができるということでもあります。またそれが協力隊の面白味でもあると思います。

2年間でフィリピンから戻られたわけですが日本に戻られて何か変わったことはありますか？

帰国直後は日本のペースに合わせるのに大変でした。現地のペースに慣らされないようにしていたつもりでし

たけどダメでした。やっぱり、日本って何もかも、ものすごいスピードで動いてますよ。逆カルチャーショックの方がよほど大きかったですよ。

参加したことによるプラス面とマイナス面はどういったことですか？

仕事に関してはプラスだったということはなかったですよ。周りの人たちには2年間遊んできたと思われているかもしれませんがね。ただ、個人的な経験という意味では大いにプラスであったと思います。やはり簡単にはできないことを経験できたわけですから。それによく「広い視野」という言葉を使いますが、日本人の視点に加えてフィリピン人の視点というのも身に付けることができたことは自分にとって大きなプラスになっていますね。ただ、帰国してから年数も経ち、だんだんと日本の生活に慣れてきてそういった感覚が薄れていくのを感じて少しさびしいですね。

最後に学生に向けて一言お願いいたします。

興味があって行きたいという思いがあるなら、積極的に参加して欲しいと思います。若いうちの2年間くらい、すぐに取り戻せますよ。たとえ取り戻せなくとも、必ずやそれ以上の別のものが得られます。協力隊に限らず若いうちからいろいろな体験をし、刺激を受けることが大切だと思いますよ。私は35歳になってからでしたけども少し若いうちに行っていれば、もっと素直にさまざまなものを吸収できたと思います。ですから恐れることなく、海外に飛び出して「違うものを体験してみる」ことです。そこで自分の人生にとって貴重な経験をすることができると思いますよ。

本日はお忙しい中、貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました。

インタビューの間に、当時のことを思い出されたように小嶋さんがイキイキしていくのがこちらにも伝わってくる、大変楽しいインタビューでした。

この記事に対する感想、ご意見は下記までお寄せください
(文責 関 克己)。

編 集

石垣成直 京都大学大学院(学生会員)
休場裕子 東京工業大学大学院(学生会員)
関 克己 中央大学大学院(学生会員)

E-mail: edi@jsce.or.jp

学生編集委員を募集します。

- 私たちと一緒に学会誌を作りませんか -

- 仕事：基本的に学生のページを担当。
編集委員会への出席(原則月1回:東京)
単発取材記事もあり
- 任期：決まり次第～1年以上 2年以内
- 資格：国内在住の大学生・大学院生であること。
土木学会会員であること。
- 報酬：なし。(旅費、取材必要経費は学会で負担します)
- 応募方法：簡単な履歴および自己PRをA4用紙1枚程度にまとめ、下記まで郵送してください。
指導教官の承認の一文を添えてください。
- 募集人員：1～2名
- 応募締切：2001年3月31日
- 応募先：〒160-0004
東京都新宿区四谷1丁目無番地
(社)土木学会 編集課 中村宛